

河北省博物館「河北古代簡史陳列」展示解説（日本語訳）

石田 敏 紀

The explanation of the exhibition of "Essential history of Ancient Hebei Hall"
in Hebei Provincial Museum (translation)

by

Toshinori ISHIDA (translator)

はじめに

鳥取県立博物館は、国際化時代に対応する博物館を目指し、1995（平成7）年以降、環日本海諸国との文化交流を検討してきた。そして、交流の第一歩として、鳥取県が1986（昭和61）年に友好提携を結び、親善交流を行っている中国・河北省の河北省博物館と、1999年6月に友好交流館としての協定を結んだ。以後、河北省の歴史・文物の調査を目的とする河北省博物館への職員派遣、2000年3月の催物展「河北省の文物と人々の暮らし」の開催、及び職員の相互訪問などの交流事業を行っている。

河北省博物館は、1953年に開館した河北省直轄の総合博物館である。当初、保定市に建設されたが、1982年に石家庄市に移転し、現在に到る。展示施設は、地上4階（事務室部分が4階構造、展示室部分は2階構造となっている）で高さ27.7m、延床面積が約2万平方メートル、常設展示室が6室、催物展や貸館用の展示室が4室ある。常設展示室の構成は、原始から魏晉南北朝時代までを展示領域とする「河北古代簡史陳列」、戦国時代の中山国を紹介する「神秘王国—戦国^{ちゆうごん}中山国—」、前漢の中山靖王劉勝夫婦墓の出土品を展示する「金縷玉衣^{きんるぎよくい}的故郷—滿城漢墓—」、アジア・太平洋戦争期の河北省を紹介する「血肉築長城—河北人民抗日紀日—」、アヘン戦争から中華人民共和国建国までを解説する「河北革命史陳列」、そして現在の河北省の産業・経済状況を説明する「改革解放的河北」であり、特に「金縷玉衣^{きんるぎよくい}的故郷—滿城漢墓—」展示室が1999年の「全国十大精品陳列」に選ばれるなど、内容や展示技術は高く評価されている。また、約15万点の資料を所蔵しており、その中には一級歴史文物（日本の国宝・重要文化財に相当）が248点（うち6点が国宝級）、二級歴史文物1,969点、三級歴史文物33,656点、革命文物（中華人民共和国建国に関わる資料）3,600点が含まれている。

しかし、こうした河北省博物館の概要や展示について、日本ではほとんど知られていない。そこで、同館の展示内容を紹介するため、河北省愛国主義教育基地資料叢書編集委員会が刊行した解説

書『河北省博物館』所収の「河北古代簡史陳列」展示室の解説文を翻訳したのが本稿である⁽¹⁾。同展示室を特に取り上げて紹介するのは、この展示室が、河北省博物館が石家庄市に移転した後、最初につくられた常設展示室であり、それ故、同館の展示の方針や特色がよく示されているからである⁽²⁾。



写真1. 河北省博物館

『《河北古代簡史陳列》簡介』（日本語訳）

「河北古代簡史陳列」は、1987年に企画した河北省博物館の常設展示の1つである。この展示では、揚長避短（長所を大きく、短所は小さく）の方法により、河北の優れた資料を用い、原始社会より南北朝までの各時期において、それぞれ以下の主要テーマを設定し解説した。

- ・原始社会期では、河北の原始人群と磁山文化の紹介に重点を置いたが、夏商期では、河北が商以前の人々の活動の中心であったこと、及び藁城市の台西遺跡に示される我が省の商代の社会の様子を主として紹介する。
- ・西周期では、主に北燕、孤竹、邢などの封国の状況を説明する。
- ・春秋期では、北狄、赤狄の河北での活動や、河北が北方民族の融合の中心であったことを主として説明する。

- ・戦国時期が展示の中心であるが、燕、趙、中山の三つの封建国家の興亡の歴史を全体として展示し、河北の人々の智慧と創造を説明する。
- ・秦代は、秦が河北での統一政策の実施を主として説明する。
- ・漢代では、封建期の中央集権体制下における河北省域内の封国の変遷を主として紹介する。
- ・魏晋南北朝期は、各民族政権の頻繁な交代と、政治・経済・文化方面における民族融合を主として紹介する。

展示室の展示設計は、展示方法と内容が適合するように心がけ、解説や図を多く用い、色調は古朴素雅の趣を持っている。総数1,390点の資料を展示しており、展示の導線は220mに達する。

第1部分：河北省域内の原始人群

今から百数十万年前の早更新世早期、華北北部の河北の大地の上では、旺盛な生命力をもった原始人の集団が活動していた。陽原県泥河盆地の東谷坨の小長梁では、旧石器時代の最も早い段階の遺跡が発見され、そこから出土した石製品には、すでに第二段階の加工がなされていた。展示品には、刮削器、硬砸器及びそれと共存した哺乳動物の化石（三門馬の頭骨、翁氏扭羚羊など）があり、当時の人類が湖浜や川岸に沿って活動したことを解説している。

今から50万年前の周口店の北京原人は、自然を征服する二種の能力（①石器の製造、②火の使用）を有していた。火の使用は、人類発展の大いなる飛躍である。展示品には、眉骨が突出し前額が低平な北京人の頭骨（複製品）と復元像がある。また、焼石、焼骨などの遺物もある。

晩期更新世は考古文化の旧石器時代中期に相当するが、陽原県の侯家窯では（山西省陽高県の許家窯村付近でも）、考古学が「許家窯人」と命名した、多くの古人類の化石と文化遺物が発見された。それは、今より約10万年前のものである。頭骨から「北京人」と比べて、大きく進歩していることがわかる。大量の刮削器のほかには、重要な狩猟具である1,000点以上の石球が発見された。同時に、特に目立つこととして、極めて小さな石器が多いが、これは我が国の細石器文化の歴史の長さをあらわすものである。

やや遅れたものとして、遷安市の爪村遺跡と玉田県の孟家泉遺跡がある。孟家泉で出土した一枚の人類の歯は、ホモ・サピエンスの歯と鑑定された。展示品には、前述の歯や尖状石器、石核などがある。

本部分の考古資料と展示品により、河北省が中国文明の発祥地であると証明できる。

第2部分：氏族共同体期

人類は、母系社会段階において、血縁群婚制により、氏族内の成員が平等で、共同労働、共同消費を行う集落を形成した。この時期に属する、今より5万年前の山頂洞人遺跡（北京の周口店）は、やはり漁労と採集経済を主としており、体を保護する衣服と自己を美化する装飾品があった。展示

品には山頂洞人の頭骨、下顎骨、骨針、石器（いずれも複製品）、装飾品などがある。

旧石器時代晩期に属する陽原県の虎頭梁遺跡では、大量の代表的な石核石器が発見された。その中では楔形石核が圧倒的に多く、華北ないし世界の旧石器晩期文化、及び細石器類型文化の起源に関する研究に対して意義あるものであった。展示品には、石核、硬礮器、鑽孔石珠、駝鳥蛋皮製の扁珠などがある。また、大型のナウマン象の頭骨と、大きな象牙の化石（長さ約4 m）は多くの観覧者を引きつけている。

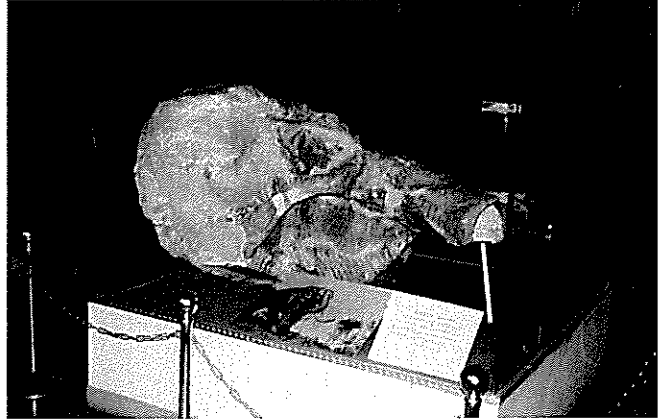


写真2. 展示風景：ナウマン象頭骨

考古学界により命名された「磁山文化」は、二十世紀七十年代の我が国での最も重要な考古発見の一つである。遺跡は、我が省南部の武安市磁山村に位置し、今より7330年前のものである。発掘調査は、ここ（滏河、漳河流域一帯）が我が省で農業が最も早く発達した地域であることを明らかにした。80以上の円形の大窯穴の中には、現在まで大量の糧食——粟——が残っていた。糧食を加工する工具である石磨盤、磨棒及び支架式炊煮器——陶盂、三足器など——が非常に多く、地方的な特色を鮮明に備えている。牛、豚、鶏、犬などの家畜や家禽の飼育もすでに始まっており、その中で鶏の飼育は世界で最も早い時期に属し、豚も華北で最も早く開始され、研究価値は非常に高い。原始紡績業もすでに芽生え、陶製の紡輪や骨ヒ、骨杼などもあった。多くの展示品は、この遠い昔の文化の豊富な内容を具体的に示している。視覚効果を強めるため、展示室には磁山文化のジオラマを設けているが、磁山文化期の自然環境、磁山人の経済、生産活動のすべてをこの優れたジオラマに濃縮しており、人々の関心を引きつけている。

今より5000～6000年前は、母系氏族社会の最盛期である。我が省では、新石器時代の仰韶遺跡が50数カ所発見されている。人類は定住し、竪穴式住居を有し、磨製石器を使用し、彩陶を造った。正定県の南楊庄では、陶製の蚕蛹と骨ヒが発見されており、早くも5000年前には、我が国の北方で、すでに養蚕や、生糸を原料とする絹織物業が開始されていたことがわかる。

“紅山文化”は、一種の彩陶、“之”字紋缶と細石器が併存し、今より約5500年前の北方新石器文化の特徴を有している。そして、近年、我が省北部の圍場滿族蒙古族自治県、滦平県、平泉県、遷安市などで発見されている。大量の石器、陶器以外に、精美な玉器もある。展示品の中には、平泉県の白石廟で出土した石鋤、承德県で出土した石斧、隆化県郭家屯出土の細石器（鏃、錘、刮削器など）、滦平県金鈎屯出土の“之”字紋陶缶がある。圍場滿族蒙古族自治県の下伙房出土の玉製の猪龍は、形体がC形に湾曲し、大きな眼と嘴は陰刻されている。最も注目されるのは、滦平県、

興隆県で出土した数点の石彫の女神像であり、その中には立像や蹲像がある。興隆県の女神像には、髪がなく、肩骨が隆起し、裸体で乳房は突出し、腹はわずかにふくらみ、両腕は膝の上に置かれている。工芸は稚拙だが、風格は古風かつ質朴で、母系氏族社会における女性崇拝を象徴するものである。これらの出土は、原始社会の形態と彫刻芸術を研究するための新資料を増やすものであった。

5000年前、父系社会に至った後、農業と手工業の初歩的な分業が行われ、製陶業は日増しに発展した。邯鄲市潤溝で発見された4400年前の龍山文化早期の2つの陶窯は、近くに各々一つの井戸をもち、その中の一つの井戸の口径は2.1m、底の直径は1.6m、深さは7.7m、生活や製陶用水として利用されており、これは、現在、我が国黄河流域で発見された最も早い井戸である。陶器は、ろくろによる製造が主で、大いに生産率が高まった。展示品の中には、磁県の下潘汪遺跡で出土したろくろで造られた陶缶がある。

唐山市の大城山遺跡で出土した2つの紅銅牌は、かつて学术界に大きな関心を引き起こしたもののだが、中国青銅器の生産の前駆と見なされている。

私有財産の発生は、集落間の戦争を引き起こした。邯鄲市潤溝では合葬坑が発見されたが、坑内の死体は、首が切り離され、あるいは縄で縛られて生き埋めにされており、あるものは斧で皮を剥がれ、あるものは部落の奴隷とされていた。階級の出現は、原始社会の解体を導いた。展示品には、邯鄲市潤溝の骨鏃が突き刺さった人間の頭骨がある。

約4000年前、我が国北部と東部の3つのよく知られた集団である黄帝、炎帝と蚩尤^{しゅう}の間に三度の大战が起こったが、その場所は、いずれも今の河北の地である。第1次は、炎帝と蚩尤^{たきろう}が“涿鹿之阿”で戦った。第二次は、黄帝と蚩尤^{しゅう}とが冀州^{きしゅう}の野で戦い、蚩尤の敗北によって終わった。第3次は、黄帝と炎帝とによるもので、“阪泉之野”で戦い、炎帝の敗北によって終わった。ここでの展示品には、『黄帝大战蚩尤』の彩色画がある。

第3部分：夏より春秋時代まで

夏、商、西周、春秋は、我が国の奴隷制の形成から、発展、衰亡に到る時期である。

1. 夏王朝の建国、商の先民の河北での活動

この単元の重点は、後者を表現することであり、夏代については、大禹^{たいう}の治水活動の範囲が今の河北地区も含んでいたことをあらわす、『史記・夏本紀』中の「禹の活動は、冀州より始まる」という記載を引用しただけである。

紀元前22世紀、商の始祖の契は、「禹をたすけて、治水に功があった」ことによって、商に封じられ、子の姓を賜り、番吾（今の平山県蒲吾）一帯に居住した。契の子の昭明は、今の涿川流域に居住した。紀元前20世紀、6世の孫の王亥は、南易水一帯の有易氏の部落で牛群を飼育し、運送道具をつくり、また牛や家畜の売買をおこなった。王亥は、有易氏の君主である綿臣に、殺され追

放された。その子の上甲微は、父の仇に報いるため、綿臣を殺したが、その主要な生活区は今の河北の中である南部の滹沱河、漳河流域であった。『河北の先商遺跡分布図』を展示するのは、それを示すためである。展示品の中の細縄紋の施された陶鬲及び陶鼎、平底盆などは、典型的な商以前の遺物である。また、磁県の下七垣では、商代早期の六孔陶窯が発見されたが、構造はより原始的である。

2. 商代における河北の統治

紀元前17世紀，“邦畿千里”の商王国の建国後，商前期には5回遷都が行われた。その中の第3回目において，“祖乙が邢に遷都”（『史記・殷本紀』）し，祖辛，祖丁もまたここを都としたが，後に水患によって，一時繁栄した都は廃棄された。考古学者は，邢台市西南に豊富な商早期の文化遺跡を発見した。ここでは，『邢台曹演庄及び周辺の商代遺跡分布図』を展示した。

商代後期，盤庚より殷（今の河南省安陽）に遷り，商の滅亡までの273年間，豫北，冀南は京畿の地となり，邯鄲，沙丘は著名な離宮，別苑となった。その北には，蘇，易，孤竹等の諸国があった。また，河北の北部には，山戎，獫狁，葷粥などがあった。展示品には，「受」，「肩」，「舟」，「矢」，「心」，「劓」，「垂伐」，「箠」などの部族や国をあらわす標示がわずかに記された銅器がある。また，青竜満族自治県，懷安県，張北県などでは，北方民族の特色を有した羊首，鹿首，牛首の短剣や，彎刀，削などの銅器と金盤糸，金臂釧などの装飾品が出土している。

3. 商代の河北の経済と文化

商代は，文明の発達した奴隷制社会であり，農業が主要な生産部門であった。1枚の卜骨の写真は，商王の武丁が占ト問神し，収穫を祈り問うたことや，命衆人（奴隷）の協田（集団作業）の様子を記録している。藁城市の台西遺跡では，底部に木製のくいと板が打ち付けられ，防潮に配慮された食料貯蔵穴が発見された。遺跡内の2つの井戸の写真には，「井」字形の囲みを見いだすことができる。台西遺跡で出土した展示品の獣面紋銅甗は，腹部が直径35cm程度で，器形は比較的大きい。著名な鉄刃銅鉞（複製品）は，隕鉄を熱して薄い刃に鍛錬した後，青銅の鉞の身を鑄て一体にしたものである。北京市の昌平商墓や河南省浚県でも発見されており，商代には，すでに鉄の熱加工技術が用いられていたことを紹介している。展示室の中には，台西の酒造場を模型（1/4）で復元したが，この遺跡からは，7.5kgの人工酵母と醸造果実酒の原料が出土している。展示品には，台西などから出土した商代の銅器，白陶，釉陶（原始的な瓷器），漆器，絹織物の残欠などがあり，内容はきわめて豊富である。

4. 台西遺跡に見る奴隷制の残酷

台西の墓葬の統計資料によると，10%の奴隷主の墓であるにも関わらず，副葬品は，全体の93%

を占め、且つすべて精美な銅器、玉器、漆器などであった。しかも奴隸は、殉葬者として奴隸主の墓穴へ埋められることを強制された。奴隸主の墓は、人間を基礎としているのである。商の紂王の時、沙丘（今の邢台以西）の宮殿においては、「酒池肉林」や、反逆者に対する酷刑が施されていた。展示の中では、大量の写真を用いて、奴隸制の罪悪の事実を掲示している。

5. 西周時期の河北の封国

西周は、「親族を封建し、周の藩屏とする」ため、厳格な宗法制度を実行した。当時の我が省域内には、主として、北燕、孤竹と邢の三つの封国があった。考古学者は、沱河流域の元氏県西張村で、軹（音祁）国の墓地を発見した（軹は邢の属国である）。展示では、いくつかの封国の歴史を、有堇鼎や小臣簋の銘文の写真、北燕の根拠地と車馬坑の写真、“匱侯”盂の写真、周公簋（別名、邢侯簋）や麦尊の写真、そして軹国で出土した臣諫簋、叔趯父卣、悠鼎など、直接関連する重要資料の写真を用い、紹介している。

6. 春秋時期の河北の民族融合

春秋時代、河北は晋と燕に服属していた。非常に多くの民族が雑居しており、東に山戎、東胡が、北には林胡、楼煩が、西には北狄がいた。北狄は、白狄、赤狄、長狄の3つに分かれていた。晋国の領土拡大によって、赤狄六部の中の甲氏と番咎如氏は、我が省の鶏澤県、魏県と大名県に遷り住んだ。北狄は鮮虞氏を首領とし、建設した国家には鮮虞中山国、肥、鼓、仇由がある。後に、肥、鼓、仇由は、相次いで晋に滅ぼされた。（鮮虞）中山国の名は、紀元前506年に初めて史書に現れる。鮮虞の名は昔の鮮于水に由来するが、考証によると、それは五台山の西南で滹沱河に流入する清水河である。春秋中期、鮮虞中山国は、今の正定県の新城鋪付近から、唐県の北西40里の峭岭に遷るが、常に晋に攻撃を受けた。のち次第に強大となり、晋、斉の争覇の中で、無視することの出来ない勢力となった。当時、河北は北方民族の融合の中心の一つであった。懷来県の北辛堡の戦国墓から出土した孟姫匱の銘文は、中原に位置する蔡国と北方の燕国の密接な交流をあらわすものであった。展示では、彩色図を用いて、北狄各部の山西、河北での移動経路を紹介した。

第4部分：戦国時期

戦国時代は、我が省の歴史において重要な地位を占めている。戦国の七雄の中で二雄が河北に位置し中山国も存在した。いずれも歴史上それぞれの輝きをもち、多くの有名な政治家、革新家、歴史上の名臣、名将が現れ、経済、文化や科学技術などの多くの分野において、非常に多くの業績をあげ、当時の全国をリードすることもあった。

展示の中には、文字、地図、表、写真などを用いて、趙国、燕国、中山国の歴史の沿革、王系、領域、都城、郡県の王墓などの概観をそれぞれ紹介し、同時に、大量の実物資料を用いて、三国の文化上の共通性と独自性を表した。戦国前期、歴史の流れに順応し、国力を増強して覇国の地位に登るため、三国は、程度は異なるが、ひとしく政治改革を行った。展示は、三国の改革や抗争を図表で示し、わかりやすくしている。重要な人物と事件は、関連する遺跡の写真や、絵画などの視覚的方法で表した。例えば、趙の武靈王が中山国を併呑し、領土拡張の目的を実現するため、“胡服騎射”を実施したことについては、趙王城遺跡の龍台、鑄箭炉、挿箭岭遺跡の写真を用いた。また、燕の昭王の“卑身厚幣”、“選賢挙能”や、中山国が王^{さく}の時代に最盛期となり、“五国相王”の動きに加わり、千乗の国の実力を備え、斉、趙、魏、韓などの大国をおどろかせたこと、紀元前313年に燕国で内乱が発生した時、斉とともに出兵し、燕を攻撃し、国境を数百里広げるといふはなばなしい戦果を得たことも紹介した。展示の中には、三つの国家の城跡と王墓（趙国は、貴族の墓の資料を用いた）の中で出土した大量の建築材料や、副葬品などを陳列し、規模が壮大で、かつ風格の異なる宮殿建築や都市施設などをあらわした。王墓の中の各種の青銅製の祭祀器（九鼎、八簋、編鐘、編磬）は、当時の礼儀制度、等級制度をあらわしている。『呂氏春秋』中で「国弥大、家弥富、含珠鱗施」と非難される王公貴族の厚葬習俗は、発掘された資料で証明することができる。いわゆる「含珠」は死者の口に玉を含ませ、「鱗施」は玉片を魚の鱗のように綴って死体の顔面や身体を覆うことであるが、戦国時代にはじまるこうした葬玉の習俗は、漢代に完整された“玉衣”、“玉匣”の殮服制度へと発展した。また、燕の下都16号墓（燕王墓）で出土した⁽³⁾、青銅製祭祀具を模倣した祭祀土器は氣勢が壮大で、展示室内に多種多様なものが陳列されている様は壮観である。

展示中で最も観衆を引きつ

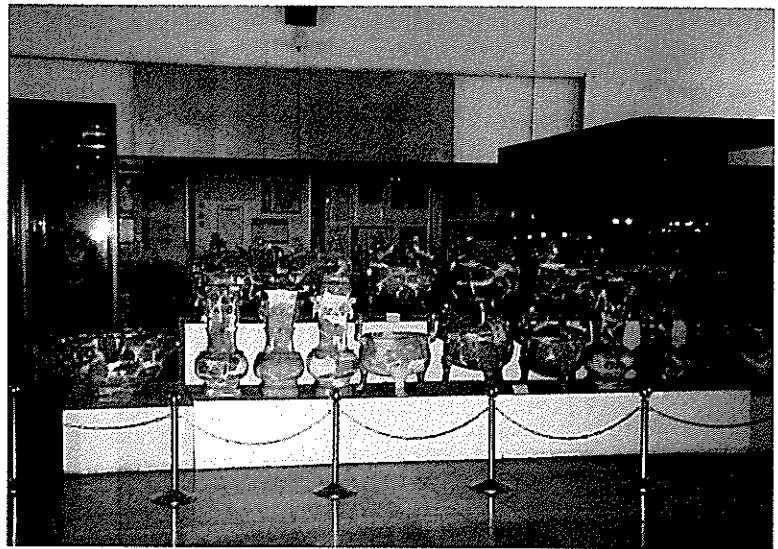


写真3. 展示風景：祭祀土器

けるものは、中山国の文物である。中山国に関する史料は、以前はわずかでしかなかったが、王罃鼎、王罃方壺と好窰^{ハコ}円壺の出土の後、わずかに中山国の王の系図がわかりはじめたことによって、この鮮という少数民族の建設した国家の謎がわずかではあるが明らかとなった。展示室の中央に立てられている5つの「山」字形の道具は、中山王の営帳の前に設けられた儀仗であり、最も特徴的で、戦国時代では稀なものである。豊富な出土物は、中山国と華夏諸国の行った礼制とが基本的に同じであり、民族的特色が少ないことを見いだすことができる。中山国は、紀元前295年に趙国によって滅ぼされた。

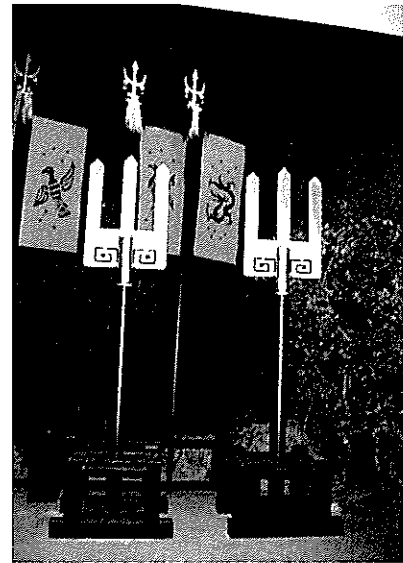


写真4. 「山」字形儀仗（複製）

戦国中晩期、我が省は、経済、文化、科学技術分野のすべてにおいて大発展した。冶金業はすでに大きく発達しており、各国とも自らの冶金センターを有し、従来の塊錬法より高温液体還元法へ進歩し、加熱、退火、柔化处理を経て展性鑄鉄を造り出す新技術は当時の中国だけではなく、全世界をリードするものであった。興隆県の大付将溝で出土した87点の鑄鉄范は、化学検査によると、すべて“白口鉄”で製作された鉄模であり、石や陶器でつくられた模とくらべ大きく進歩し、すでに製品の規格化や、生産率が大きく向上していた。鑄鉄の農具や工具の使用、牛耕の普及、入念な作業の重視、水利灌漑の条件を改善（漳水の灌漑、アルカリ土壌の改造、桔槔^{はわつるべ}を用いた揚水）するなど、農業生産量を大きく向上させた。展示品の中には、農民の耕作の必要に応じて著された『荀子・富国篇』がある。

展示の中には、特に1コーナーを設け、趙、燕、中山各国の鑄造した各種の布銭、刀銭や円銭などを紹介しており、それらの変遷などについても簡単に説明し、当時の商業発展の状況をあらわした。

製鉄、鑄銅の発展も非常に顕著である。燕の下都44号墓より出土した鉄剣、矛、戟の金属組成に関する研究は、戦国後期の燕国がすでに浸炭鋼の技術を採用していたことを明らかにした。煉鉄の中に炭素を加えて高炭素鋼を製造することや、焼き入れ、焼き鈍しなどの熱処理方法を併用することによって、鋼の性能を改良し、刃部を硬く鋭利にした。青銅の鑄造上では、失蠟法（即溶模鑄造法）を用いて複雑な器形を製造した。『周礼・考工記』の「金有六齐」は、青銅鑄造の六種類の異なる銅と錫の合金の配合比率の経験をまとめたものである。

展示内容を豊富にするため、この部分の最後に「戦国の服飾」の一節を挿入し、楼觀式闕形銅飾や銀首人俑灯、小玉人などの文物を用いて燕国の農奴主と農奴の姿を表し、また、中山国の蛇使いの芸人と俳優の服飾や、中山国靈寿故城内で出土した金盤糸耳環、松石、水晶の首飾り、象嵌の銅泡飾りのある上着を用いて戦国時代早期の鮮虞の男性の服飾を紹介した。